

じょうはな

城端曳山祭

なんとし

「田圃に水が入るころ 越中の小京都南砺市城端に 独特の山車の軋み音が響きます」

城端の郷土史を語る曳山会館の映像はこの言葉から始まる。城端は平成の合併で南砺市となったが、一向宗の拠点であった善徳寺の門前町として一世を風靡した町並みが気に入り、以前にもこの曳山祭を観に訪れた町だった。

富山県というより越中は城端に限らず、曳山の宝庫である。今回はその越中曳山祭を束ねる組織の会長であり、かつて富山県議会議員や参議院議員を勤められた河合常則さんに城端の町と祭の由来を解説していただき、存分に楽しんだ。一般に政治家は故郷の祭に無関心である。祭は選挙の票にならないこと、あるいは神社の宗教行事であることなどの理由で踏み込んでこないのだろう。しかし河合さんは故郷の山川草木と文化への思いに溢れた人であり、祭の本質を理解した教養人であった。

日本の祭はまず原始宗教である神道の神社が先行し、そのあと渡来宗教である仏教の寺院が習合して発展してくるものだが、この城端では1559年城ヶ鼻城主荒木大膳の招きにより浄土真宗の善徳寺が作られ、そのあとを追うように1574年産土神として城端神明宮が勧請され祭は発展したと郷土史は語る。

仏教寺院の建設は同時に仏壇、彫り物、金具、塗り、織物など伝統工芸の技術職人を育て地場産業を発達させ、絹織物は上方・江戸へ進出、今で言う外貨を稼ぎ、影響を受けた。だからこの町は越中の小京都と呼ばれ、今に江戸文化の端唄が残ったのが、国指定無形文化財の祭になった所以である。

6台の曳山は歴史に凍結された伝統工芸が、春風に乗った祭囃子に解凍され、見るものを堪能させてくれる。曳山を「ギュウ車」と呼ぶのは車輪の軸に檜が細工してありギュウギュウと大きな音を立てて巡行するところが特徴である。曳山の後に続く庵屋台は京都祇園の一力茶屋や江戸吉原の料亭を縮小した造りで、細かいところまで実に精巧に工芸品の技が凝縮されている。丹後縮緬や加賀友禅の水引幕に囲まれた庵屋台の中からは江戸文化の粋三味線と端唄が流れてくる。

山宿やまやどと言って、個人の座敷を開放し神棚を設け神饌を供え、花器・屏風・絵画・書など美術品を飾りお客を招待すると、その家の前に庵屋台が止まり端唄を聴かす。幾つもの山宿を巡ったが、中に浜田庄司の大きな花器があり、そういったお宝を観るために遠くからくる数寄者もあると聞いた。この山宿を主宰することは一世一代の張り込みで100万単位の金のかかることだそうだが、ここにも祭の放射する散財のエネルギーを観た。

正直、GDP至上主義の現今の生き方から少々取り残された城端で、和装で端唄を楽しむ春の宵は、谷崎潤一郎「細雪」の世界が頭をよぎった。祭が日頃は眠っている町のポテンシャルを引き出すという事か。

